〔日本の水墨画展によせて〕

立ち上がる維摩

―狩野山雪筆維摩居士像―
紙本墨画 117.0×45.5cm

維摩は釈迦の在世時、インドのヴァイシャリーに住んでいた富豪で、在家信者(居士)の姿で釈迦の教化を助け、『維摩経』を説いた人として知られています。

この維摩居士の人物像は、すでに大乗仏教の諸宗派で彫刻や絵画に表わされていますが、禅宗では中国、日本でともに隆盛をみた「居士禅」の理想像として、在家信者たちに特に重じられました。その図像は、維摩居士とその病気見舞にきた文殊菩薩とが対坐して問答を交わしたという『維摩経』問疾品の逸話をイメージ化したものです。維摩は病床で、払子を持ち、膝をくずし、脇息に臂をかけ、文殊に話しかける一口が開いているのはそのため一坐像が定型となっていますが、後、室町時代の文清の「維摩居士像」のように、禅僧の肖像画の影響をうけて、半身像でも表わされるようになりました。維摩への尊崇の気持が、より親しいものに変っていったからでしょう。最近、奈良大学の古原宏伸教授によって見出された元時代の「維摩居士像」(絹本墨画)は、文清画と図様が大へん似ており、半身像の源流が中国にあることを知る貴重な資料です。

ところで、江戸初期の京狩野の狩野山雪(1590―1651)は、奇矯な個性をもつ画家ですが、室町水墨画の伝統を継承した作品も多く遺しています。この山雪の「維摩居士像」もその一つで、立姿で払子をバットのように振り上げた元気な維摩像は他に例がありません。維摩像の儀軌をはなれた新しい解釈による人間像の誕生といえましょう。その皮肉なまなざし、結んだ口元から、近世人としての山雪の姿が浮んできます。　(林進)

維摩居士像(部分)　元時代

維摩居士像(部分)　狩野山雪筆

季刊 美のたより No.85
昭和 63 年 11 月 11 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.